

出雲勢による支配から 大和王権による支配へ

越中古代史を探る

姉倉姫事件の鎮圧は出雲勢 による越中統一を表現？

先月号の『富山の風景』で、『神通川と呉羽丘陵ふるさとの風土』（廣瀬誠著・桂書房）をもとに、姉倉姫の神話を紹介した。簡単に振り返ると、船峯山（富山市舟倉の一带）を本居とした姉倉姫という女神は、能登石動山の伊須流伎彦と夫婦だったが、伊須流伎彦が近くの杣木山の能登姫と通じたため、姉倉姫は激怒し、この三角関係のもつれから越中・能登は戦乱となった。この騒動を聞いて、出雲から大國主神（別名・大己貴命）がやってきて戦乱を鎮め、関係者を処罰した。姉倉姫は小竹野（呉羽）に謹慎させられ、機織の仕事で罪を償わされ、伊須流伎彦と能登姫は海浜にさらされた——という神話である。

今回、この神話の意味と越中の古代史について、とても参考になる資料を見つけることができた。『喚起泉達録』に見る越中古代史（棚元理一著・桂書房）である。棚元氏は、『喚起泉達録』にある「大己貴命（大國主ノ神）が国作りをした時」がこの事件を解明する手掛かりの一つになるという。2世紀は「魏志倭人伝」にいう争乱の時代で、越ノ国でも豪族が勢力争いを繰り広げ、能登の豪族・能登姫等が国境の伊須流伎彦を誘い込み、強引に越中への勢力拡張（領地横領）を企てたことから姉倉姫事件が起こったと分析する。そして、出雲の大己貴命（大國主神）が、この機会を利用して越ノ国へ下向し、越中を平定したのだという。越中を統一した大己貴命は、呉羽丘陵に越中統治の拠点を置いて農耕地の開拓や絹織物の生産を奨励し

たという。

※「喚起泉達録」は、富山藩3代藩主・前田利興や4代藩主・利隆に仕えた野崎伝助が、今から約300年前、各地に散在していた伝承を収録したもの。また、伝助の孫で、8代藩主・利謙や9代藩主・利幹に仕え、藩校・広徳館の学正(教授)も務めた野崎雅明は、祖父・伝助の著書をたずね、自らの見聞も加筆して、越中最初の通史「肯搆泉達録」全15巻を完成したという。なお、戦後、「喚起泉達録」は荒唐無稽な伝説の累積・物好きの架空創作として史的価値のないものとみなされ、「肯搆泉達録」は文学的脚色をまじえた一応の史書といわれてきたそうだが、棚元氏は間違いなく貴重な越中古代史の資料だと強調されている。

★以後、「喚起泉達録」は「喚起」、「肯搆泉達録」は「肯搆」と省略。

平定後の統治を託した(「肯搆」では逆になっていくそうだが、棚元氏は「喚起」の記載に従っておられる)。緒浜から付き添ってきた浜子達をこの地に残し住まわせたという(たしかに、富山市婦中町浜子という地名が存在する)。また、鶴坂神社を勧請したともいわれる。大彦命は、急いで越後へ出発。越中国滞在は短かったという。崇神天皇11年4月には会津から帰京している。

大彦命帰京後の越中の混乱

越中国の統治を託された手刀摺彦は、太田郷卯辰山の堡にいて、四郡を司り、各地の豪将達とともに田地の開拓を進めたという。統治の最初の頃は、大和王権の税制が分からなかったため、旧来の出雲型貢租(年貢・租税)を踏襲してい

大彦命が進めた大和王権による越中平定

崇神天皇10年(紀元前88年)9月、第10代崇神天皇は、第8代孝元天皇の皇子・大彦命に詔して、「北陸道へ行き、若し、教を受けざる者あらば、乃ち兵を挙げて伐て」と命じた。大彦命は、征討將軍となった。3世紀前半は、大和王権が全国統一を進めた時期で、日本海沿岸地方の出雲勢力が大和王権に経略された時期。大彦命は同年10月、大軍を率いて都を発ち、若狭の緒浜(現在の福井県小浜)に到着。緒浜では、水運に詳しい筥富貴、飯富貴という老夫婦が北陸地方の氣候風土を詳しく説明してくれたという。そして、老夫婦は道案内として10人の浜子(海陸のことに慣れた者)を付き添わせた。大彦命は能登半島を迂回する水路を辿

たようだ。手刀摺彦は、大和型行政組織の整備を急ぎ、大和化の先進地の能登や、越中の有力な8人の神胤(由緒正しく、経験豊富な優れた人材)達を卯辰山の堡に招いた。澤古舅(舅は、老翁と同じ敬称)、潔石高住舅、大路根老翁、富崎舅、甲良彦舅、雄瀬古、美麻奈彦、玉椎老翁である。その後も、所々の神胤が次々と集まり、「太田の堡」は日々にぎやかになり、繁栄したそうだ。

ところが、短期間に集められた神胤達と、在地の豪族郷將達との間に混乱が生まれたという。そこで、手刀摺彦は、副将・手刀椎摺彦や郷將等を招集し議論を行った。その結果、卯辰山の統治中枢には、従来通り在地の豪族や郷將が占め、神胤達の多くには、越中平野部を望む周辺の要地12カ所に堡を設け、そこに住まわせたという。

り、岩瀬水門に到着(当時の神通川は、呉羽丘陵東麓に沿って流れ、丘陵末端部を迂回して、今よりも西側の打出八重津から海に注いでいた。河口は岩瀬水門といわれ、越中屈指の湊であったという)。

その後、神通川をさかのぼり、伊豆部山(現在の夫婦山。富山市八尾町の奥にある)の麓、杉野(速星神社が鎮座する富山市婦中町の地とされる)に上陸。その後、太田郷中地山(富山市太田南町。刀尾神社境内を中心としたところ。卯辰山ともいう?)に堡(土や石で築いた小城)を築き、手刀摺彦を置き、伊豆部山の麓、荒地山には手刀椎摺彦を置いた。各地の豪族たちは征討軍に威圧されて帰順したという。これにより、大彦命は、豪族たちと戦火を交えることなく越中を平定することができた。大彦命は、手刀摺彦を長、手刀椎摺彦を副として、

この堡を「越之十二城」あるいは「十二名城」と称した。なお、このうち、越中国内に設けられた堡城は6カ所程度であったようだ。
東城：澤古舅 後の角間城
辰城：美麻奈彦 後の萩城、新庄
新川城
熟城：富崎舅 後の厚根城(今石動にある山城)
辻城：甲良彦舅 後の日宮城(黒河郷念仏谷にある山城)
滝城：玉椎老翁 後の白滝城、富崎城
崎城
安住城：潔石高住舅 後の安田城(安田山にある)

神胤達に加えられなかったことに激怒した阿彦

阿彦は、布勢神倉稲魅命(倉稲の魂命と同神)の後胤(子孫)で、大彦命の越中平定の頃、父と岩峠へ来て、手刀摺彦に従ったという。大

彦命が帰洛後も岩嶮にとどまり、中地山に堡を築いた。手刀摺彦が阿彦に立山山麓地帯の統治を任せたのではないかという。が、手刀摺彦にとつて、布勢神の傍系の阿彦は一郷將にすぎず、神胤達とは見なしていなかった。ところが、阿彦は、布勢神一族が大彦命の越中平定に協力したことを理由に、手刀摺彦が自分を神胤達に加えなかったことに激怒したという。

阿彦については、次のような記述があるという。

「常に人の上に立つていることを好み、従う者を可愛がり背く者を殺した。次第に奢り心が起こつて阿彦国主と僭称(身分を越えた地位を名乗る)した」：『首搦』

「己が勇を誇り人を蔑み農業を顧みなかった。大彦命の帰洛後は、世に恐れる者なしとして日夜奢侈に溺れるようになった。その上、

越中行きは道程は遠く、阿彦勢が西に向かつて堡を築いて道を塞いでいるので、船のままで行かれたらよいと申し上げ、水運に長けた友の《珠洲ノ近藤》の水先案内で出発し、石瀬之磯(場所は不明)に到着した。大若子命は大竹野(後の小竹野。今の呉羽)に本陣を置き、佐留太舅や甲良彦舅に岩嶮之堡(富山市大山の中地山城に当たるといふ)を攻めさせた。彼らは激しく阿彦勢を攻め立て深手を負わせたが、堡に火を放った時、突然の水攻めにあい空しく帰還したという。

報告を聞いた大若子命は、自ら出陣して再度、阿彦勢の堡城攻めを決意した。激戦の末、走天狗を討ち取ったが、突然冷水が湧き出て戦陣が乱れ、ようやく高台(三嶋野)に辿り着いたものの阿彦勢の放火に取り囲まれてしまった。標劍の靈験により窮地を脱したが、

手刀摺彦が《十二城》を定めた時、その一所も与えられなかったことに激怒し手刀摺彦や《十二城》からの通達を全く聞き入れなかった」：『喚起』

手刀摺彦等に抵抗を続ける阿彦のもとに、王権に不満を抱く豪族や内通する者が集まってきた。そして、武力に勝るとみるや、突然、手刀摺彦や神胤達のいる「堡十二城」を攻め始めたという。「阿彦ノ乱」の始まりである。

阿彦は、この奇襲攻撃により、手刀摺彦の「中央城」、美麻奈彦の「辰城」、甲良彦舅の「辻城」などの領域を除いた東部平野を手中に収め、西部平野への侵攻を企て、砺波郡かみほ枯山に堅固な堡を築き、近辺の山野を押領(他人の所領の田畑や年貢を取奪支配すること)した。

阿彦が辻城領域を犯す企てがあったことを察知した甲良彦舅は、枯

大若子命の軍勢でも岩嶮之堡を打ち破る事はできなかった。

姉倉姫の神託をえて 阿彦討伐に成功

大竹野に帰った大若子命は、岩嶮之堡に阿彦がいなかったことを不思議に思い、斥候に探らせる、阿彦は大若子命が陸路を辿つて越中に入ると思い「枯山の堡」に在ることがわかった。大若子命は諸將と協議して枯山攻めを決定し、直ちに將兵を派遣した。しかし、堡の護りは堅く、阿彦勢も堡内に閉じこもり戦いを挑まなかった。その上、長雨で川が増水し、長引く駐留(大若子命が到着して3年経過していたという)に將兵の戦意も衰えはじめてきた。大竹野の大若子命は、これを憂い、枯山攻めに出發できる晴れ間を窺う毎日だったが、そんな時に、姉倉姫の神託が

山の堡に先制攻撃をかけ、犬攻めや落石攻めなど激しい抵抗を突破し、敵將を打ち取ったが、阿彦等は取り逃がし、火攻めにより堡を破ることはできなかった。なお、『喚起』によると、枯山堡とは、砺波市の鬼力城(別名 浅野谷城、安川城)ではないかという。甲良彦舅の苦戦を知った手刀摺彦は、郷將達を卯辰山の堡に集め、朝廷に使者を派遣することを決める。

大若子命が天皇より標劍を賜り、越中へ下向

垂仁天皇81年3月、天皇は、事ゆるがせにすべからずと、大若子命に官軍を率いさせ、急ぎ越中へ派遣した。大若子命は、難波津から船出し、同年4月下旬に越路ノ浜(越前寄飯浜、敦賀)に到着。越路ノ浜には婦負郡南杉山の佐留太舅が出迎えていた。佐留太舅は、陸伝いの

あつたという。詳しい内容はここでは省略するが、その神託に従つて宮社を造営し祈願を行ない、討伐軍を再編成し、枯山之堡を攻めた。阿彦は岩嶮を目指して逃げ去った。翌日の戦いで側近を失つた阿彦は、覚悟を決め、打つて出て、大若子命の本陣を目指して突き進んだが、遂に討ちとられた。

大若子命は、姉倉姫の神徳を末長く顕彰するため社殿を造営するとともに、大竹野の北方神通川沿いの地(富山市八幡)に大己貴命(大国主ノ神)を祀る越中一宮を造営したという。大若子命は、天皇から大幡主の名を賜つたという。

「阿彦ノ乱」を荒唐無稽とする説や日本武尊の東征物語を模倣したものとする見解もあるそうだが、越中の古代史を探る上での重要な補助線になることは間違いないだろう。